青春出版社

著者紹介

大正7年，長野県に生まれる。県立諏訪高女卒業後，満州に渡る。終戦とともに三人の子供を抱え北朝鮮で生と死の境を一年もの間さ迷う。帰国後，病床に呻吟しながら子供たちへの遺書として綴った記録『流れる星は生きている』が大ベストセラーとなる。現在朝日新聞，信濃毎日新聞で身上相談を担当しており，多くの女性の生き方を示唆している。主な著書には『三つの国境線』『灰色の丘』がある。尚，夫君は作家の新田次郎氏である。

いのち流れるとき——ひとりの女として妻になる才覚——

昭和四十六年二月一日　第一刷
昭和四十六年四月二五日　第五二刷

著者　藤原てい
発行者　小沢和一

發行所　株式会社　青春出版社
東京都新宿区若松町73番地
振替番号東京九八六〇二番
TEL（203）五一三一～五

★この本をお読みになったご意見ご感想を編集部までお寄せ頂ければ幸いです。

印刷・堀内印刷　製本・石毛製本

0000—204300—3822

藤原てい

いのち流れるとき

ひとりの女として妻になる才覚

青春出版社

まえがき——いつも心の底に必要な決心

女性は男性と対等になろうと言い、子供も生まず、たとえ生んでも、育児も家事も、男性と共同で、その労力を二分していこう……そんな風潮があります。それもひとつの主張かも知れませんが、それなら、社会的な仕事も、男女共同で、ある日は夫が出勤し、次の日は妻が出勤するという形体をとらなければいけなくなると思います。しかし、私のような女には、それは困ったことになります。満員電車に揺られて会社へ着くだけでもくたびれ果てるだろうし、その上に計算機でも使わせられれば、まったくお手あげになると思います。それよりも私は家にいて、ナベ、カマを洗い、子供を育てている方が性に合っているし、男性よりもずっと上手だと思います。だから、お互いに得意な方の仕事をしているだけであって、どちらが人間として上等で、どちらが下等だというようなことはないと思います。まったく平等なはずです。

私はかつて北朝鮮の動乱の中で、夫と離ればなれになり、五歳、二歳、生まれて一ヵ月目の三人の子供を抱えて、山野を放浪していました。何日も食べられない日、生命の恐怖におののいた日、私は何度も死ぬことを考えました。しかし、その苦しみを乗り越えて無事に今日まで生きて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

帰って来ました。

そんな私を見て、強い人間だと言う人がいます。私は静かに自分をふりかえって見たときに、もしあの時、子供たちがいなかったら、あるいは私は死んでしまったかも知れません。それはまったく子供たちにすがって、生きてきたようなものでした。子供たちへの愛情が、死の淵から私を救ったと言っていいかも知れません。しかし、それは盲目的の愛ではなかったことだけはたしかです。ほんとうの愛情というものは、冷徹なほどの理性の上に築かれていくものだと、今はしみじみ思っています。

人には、そして女性にはさまざまな生きかたがあります。平凡に生きる人、厳しく生きる人、理想に生きる人、情熱的に生きる人……しかし、とにかく私たちは生きなければなりません。どう生きたらいいのだろう。何を目的に生きるのだろう。私はずっとそれを考えて生きてきました。

その答はなかなかでないかも知れませんが、人がそれぞれ、いつか昔をふりかえって、今を考えるように、私がこれを書いたのは、私にとって今日まで歩んで来た、ひとつの道標という意味があったのです。

藤原てい

目

次

I 愛との認識——確かな愛とは何か……13

自分に愛が欲しかったら——15
私は負けたくなかった 15
もうれつな愛のあり方 18
はじめて会ったときに 21
たった一度だけであっても 23

お互いに何を信じ合うか——26
その底にうごめく心理 26
確固たる自分はどこから得るか 28
逃げた男を追うものではない 31
勝者と敗者は紙一重 33

くい違う男と女の求め方——36
精神が肉体をリードする立場 36
捨てた方がいい男 38
嫉妬の苦しみと本能 41
自分を無にしてとび込むひと 44

Ⅱ 欲望との認識——この人を愛しとうせるか……49

この人を夫にしていいか——51

舟のオールを握ってくれる人 51
何かプラスアルファが欲しい 54
自分のふん切りの方法 56
〝くり返しが出来ない〟ときの決心 59

夫の感覚、妻の感覚——62

妻として持つ義務感 62
夫をおよがせておく妻の自信 65
女の胸にこたえた男の心情 67
欲望との葛藤 70

〝生きがい〟の証(あかし)は何か——73

女が仕事を持つとき 73
その何を信じていくか 76
生きていくうえの〝手〟 78
もろさは足許にころがっている 80

自分が没入できるものは何か 84

Ⅲ 結婚との認識——妻として生きる覚悟 …… 87

ひとりの女としての妻 —— 89

妻が必要になる才覚 89
どんなに愛する夫であっても 91
心の引き出しに仕舞うこと 94
夫に持たせたい妻の気持 96

年代が違った女同士 —— 99

夫を生んだ親との意識 99
孤独にとり残された姿 101
くい違っていく心の内側 104
いつまでも心に残す傷 107

家庭をつくるほんとうの知恵 —— 110

妻というものの習性 110
生きる張り合い 113

踏みとどまってしぼる知恵 116
外側と内側の二面性 119
自分を無にするとき 121

Ⅳ 死との認識——いつも心の底に必要な決心 …… 123

ただ一言の中に —— 125
誰のために生きているのか 125
自分の選んだ道には 128
自分への姿勢を持つ 131
母がいつもいる場所 133

自分に負けてはならない —— 136
おふくろとしての信頼 136
どんな母親がいいのか 139
自分に敗けない苦しみ 141
人間に必要な部分 144

言ってはならぬ心の日々 —— 147

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

親になることの決心 147
痛くせまる日々 149
くり返し言いたい一言 151
その日のためにあった〝しつけ〟 153
切ないひとつの心 156

V 目的との認識——心を満たす才気 …… 159

その人が「ダメだ」と思ったら—— 161
明るい日も暗い日も 161
イザそこへ飛び込むとき 163
ひとたび踏み切ったら 165
弱い人間が生きるとき 167
たった一度の自分の人生なら 169
自分の弱点から脱け出すために—— 173
凡愚の女のかなしい足跡 173
人間として一番美しい姿 175
女の顔も環境でかわる 178

自分で自分を淘汰していく方法 181
何を一番大切にするか——184
自分の苦しみを助けてくれる人 184
人間が逃げるとき 186
死とは何とラクなのだろう 188
しあわせに迫る不安 191
この空の下のどこかに 193

Ⅵ 宿命との認識——自分だけのほんとうの生き方……197
女を生きる才覚——199
家庭の自分らしい生活 199
とり残されていく不安 202
男と女とはこれほど差がある 205
女は何に負けるか——209
女の足許にあった落し穴 209
心は一種の陶酔境である 212

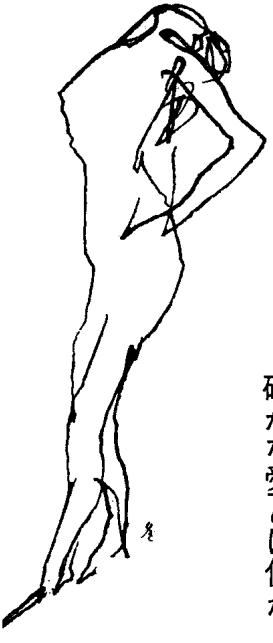
女が強さを発揮するとき 214
男になろうとしても無理である 216
何のために生きているのだろうか —— 219
女性の心の姿勢 219
本当の人生とは何であるか 222

章扉カット・山中冬児

I 愛との認識

——確かな愛とは何か

――確かな愛とは何か



愛というものは、第三者からみれば、狂気の沙汰だ。男は秘密を知りたがり、女はそれを隠そうとする。その攻防戦が、お互いの愛をいつまでも湧き出る泉のように新鮮にする。

自分に愛が欲しかったら

私は負けたくなかった

現在、ここにこうして生きているということ、それじたいが愛であると私は考えている。自分の生命をいとおしみ愛する情熱なくして、他人を愛し、人類を愛し、自然を愛し、などという力が出ようはずもないからである。

私は、物心ついたとき、たぶん小学校の二年生のときだったと思うが、死の恐怖にとりつかれた。別に身近に死者が出たわけでもない。自分が病気をしていたわけでもない。いたって健康で、無邪気でおてんばな少女だったはずなのだが、「死にたくない……」と、夜な夜な母の身体へしがみついて泣きわめいた。

「バカだねえ、お前は……」

母は一笑に付してしまっていたけれども、私は本気で、この恐怖からのがれるためには、庭の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com